

《近代日本文学の系譜》：まとめ

(別構図参照)：ページ最下部在中

甲：『近代十九世紀の構図』 乙：『非近代日本の構図』の対比

~~~~~  
《以下、論考に際しての分類及び略号化》・・・恆存の「二元論」的捉へ方。

「支配＝被支配の自己」・集团的自我・「九十九匹」・実生活（実行）政治・・・A  
神に従属する自己・個人の純粋性・個人的自我・「一匹」・芸術・文学・・・B  
全体・絶対・神・・・・・・・・・・・・・・・・・・C  
自己完成・自己全体化・自己主人公化・個人主義化・・・・・・・・・・C”  
詩神・後盾（「自家撞着」の支へ）・・・・・・・・・・C2  
宿命・神意・天命・秩序・文化・・・・・・・・・・D1  
信仰・自己劇化・演戯・自由意志・自己主張・・・・・・・・・・D2  
実在感・必然感・全体感・生き甲斐・充実感・・・・・・・・・・D3  
~~~~~

乙：『非近代日本の構図』でスタートした明治に起因する問題

実感 D3（実在感・必然感・全体感）喪失の問題・・・そして実行 A と芸術 B

*「無限定の自己」の問題・・・恆存は「無限定の自己」といふ言葉を、ハムレットに適用し、二葉亭四迷、鷗外、漱石の明治維新後の作家たちの「実感依拠」に対してもこの問題を展開してゐる。（p 555：全6「独断的な、あまりに独断的な」）

無限定の自己といふ名の、江戸幕府瓦解が招いた「規範喪失」は、二葉亭四迷、鷗外、漱石、彼ら明治人を苦しめた。彼らの人生或はその創作の主題にそれは大きく関係した。維新後の精神的空白が齎す、集团的自我上への表現せられるべきものの不在（敵である「全体」を喪失したがための：吉野注）に繋がったのである。それが、鷗外を歴史小説へと向かはせ、漱石をして「自己本位（私の個人主義）」の主題に結実化させていった。「かれらは封建道徳の背後に道徳そのものを見てゐた」（「自己劇化と告白」P417）からであると恆存は言ふ。そしてそれは四迷をして「国家、つまり国事に参加直接参加するといふ行動によつて、枠を失つた自己（無限定の自己：吉野注）の歪みを匡さう」とさせた。上記他の評論で恆存はそのやうに述べてゐたと記憶する。（参照：全6「独断的な、あまりに独断的な」他）

この二つに共通してゐる事は、どちらも「統一体を形つくつていた一つの世界の崩壊期」での登場人物といふことだ。そして恆存は、かうも言つてゐる。「ルネサンス以来の近代市

民社会（自由・個人主義・民主主義といふことか：吉野注）が、ふたたび崩壊期に直面してゐる現在」（P 560）がここにあるのだと。

といふ事は、現代（特に戦後日本：「戦後の日本は精神的空白」）をも「無限定の自己」に晒されてゐる時代と捉へてゐる事になるのではなからうか。

ここに『無限定の自己＝「解放されて仕へるべき何をも持たぬ自我の不安」＝統一体を形つくつていた一つの世界の崩壊期』といふ図式が成り立つのである。

そして、「解放されて仕へるべき何をも持たぬ自我の不安」とは、個人的自我の喪失、しひては集团的自我の喪失をも意味し、結果として「自己喪失」をそれは意味するのではなからうか。

恆存はその「無限定の自己」を解決する手段に「自己劇化」のことを説いてゐるのである。戦後の日本を「精神的空白」（出典不明：吉野注）と定義する氏は、そこに維新後と同じ「無限定の自己」を時代的宿命と見たのであらうか。そしてその超克の方法論として「宿命/自己劇化」を晩年の著作及び覚書（全6）に展開させている。

西欧・日本 彼我の差	西欧十九世紀	明治～大正日本（主として自然主義文学）
『近代日本文学の系譜』 ↓ （乙：『非近代日本の構図』）	<p>「ヨーロッパの自然主義は（中略）決して私小説への偏向に道を通じてはゐなかつた。（P18）</p> <p>~~~~~</p> <p>「自己否定の文学としてのリアリズム＝自然主義」 P20</p> <p>甲：『近代十九世紀の構図』</p> <p>自己否定とは・・・「自然に対して人間の自主性を奪取せんとした科学の実証精神が、そのあくなき切先を人間性そのもの、自我そのものにさしむけたところに明瞭な姿を見せることとなつたエゴイズム」。それは、</p> <p>西欧近代が実証主義によつて、エゴイズムを「自我の必然」として、近代自我（個人主義）の俎上に浮か</p>	<p>「多くの作家達は生活の場（A）で解決すべき問題を芸術（B）のなかにもちこんだ」</p> <p>左図の「ヨーロッパ文学と不思議な縁を結んだ日本の近代文学の宿命的な系譜」 P19</p> <p>~~~~~</p> <p>自己否定の文学ではなく「自己主張」（作家は社会におはれるものとしての）→私小説化</p> <p>乙：『非近代日本の構図』</p>

	<p>び上がらせてきたことである。即ちかつては個人的自我の範疇とみなされてゐたものが、詰め腹を切られて集団的自我上に浮かび上がってきたもの。「エゴイズムと虚栄と俗悪のかたまりとして」。</p> <p>〔有態な言葉でいへば、「慈悲だ、他者愛だ、自己犠牲だと、ご当人が思い込んでいたものが、おつとどっこい、只のお為ごかし、所詮は自己愛が出所の自己満足でしかないしろものだつた」といふこと。すっかり本体が露出して身もふたもなくなつてしまつたのである〕（小生文）</p>	
漱石	<p>近代ヨーロッパ文学の心理主義の根底にあるヒューマニズム・・・自然・人間性・自我に対しても自主性を確立せんとしてやまぬ態度。P25</p>	<p>漱石・・・「その純粹さの故に社会悪を背景としてエゴイズムを描出するすべをしらなかつた」「社会悪 A とは無縁のより純粹な形における人間悪 B」 P25 それが故のリアリズムの未開花。</p> <p>「彼の苦悩と良心とを通じて人々はますます現実と社会悪から遠ざかる」</p>
P28 甲・乙の構 図的相違	<p>自己完成 C'の先にある理想人間像 (C)</p>	<p>「芸術と自己完成との一致」・・・自己保障自己弁護としての芸術・文学</p>
P30 重要項目	<p>彼等の自己否定・・・「民衆 A の否定を通じて、ほかならぬ彼等の芸術家概念 B が危機に瀕してゐるのである」</p> <p>芸術も文学も「人間活動の他のあらゆる分野とともに、プロテスタンティズムに教導されて近代自我の完成をその本道としたまで」</p> <p>「その背景に発見されるものは神 (C)」『小説の運命』</p>	<p>芸術家の自己 B のみが問題・・・「日本の近代自我の確立も、ただ芸術概念を通してしか行われなかつた」。</p> <p>自己の完成 C'自我の確立と言ふ理想 (C') よりは D2 (自己主張・自己拡大の欲望)。即ち神なくしての自己完成は自我主義に墮するのみ。</p> <p>神ではなく詩神。彼等の芸術とその精進を支へる理念を芸術そのものに求める自家撞着。</p>

	甲：『近代十九世紀の構図』	乙：『非近代日本の構図』を支えるものは神 C ではなく、詩神 C2
P30 重要項目 難解点 参照：小生小論「一匹と九十九匹と」の参考資料	<p>「十九世紀のヨーロッパ文学を通じてみられる自己主張・自己拡大 (D2) は、その基底に神に形どつて理想人間像の完成をめざす願望と意思とを持つものであり、それが完成と同時に自我の限界を突きあててに至った過程において心理主義的リアリズムに技法的必然を見いだしたにほかならない」。</p> <p>とは・・・</p> <p>心理主義的リアリズムは、甲：『近代十九世紀の構図』の徹底を図りその結果、近代自我（個人主義）の限界を其処に見い出したと言ふ事。</p> <p>即ち、実証主義そして社会の合理化に追ひ詰められて詰め腹を切らされた、個人の純粹性（個人的自我）の「可能性の領域は圧迫され、狭窄になり、つひに絶無になつたとき、ひとびとはその代償として獲得できた現実世界における自由を、自分の掌のうへにみつめて、これはひどくつまらないものだと気づいたのである。こんな程度のもののために、可能性の夢を犠牲にしてきたとはばかばかしい。だまされた、と狂気のやうにわめきだした。ニーチェ（1844～1900）は気が狂つた。フローベールはもつと冷静に復讐の手段を考へだした。——個人の敗北（自己否定：吉野注）を身をもつて敗北してみせること、可能性の天窓は一分のすきもなく完全にとざされ、現実世界で獲得できた自由のいかにつ</p>	<p>「実行と芸術」の一致の問題は、「芸術の内部においてその合一を図る」・・・私小説。（藤村・花袋）P34 ~~~~~</p> <p>P35 重要項目</p> <p>嘉村礒多・・・「彼の先輩たちがなしとげた自己確立の貧寒さに居たたまれぬまま、その空疎を埋めんが為に先手をうつた自己解体。（中略）そのやうにして解体しうる自己内容であつたことに、注目すべきものがある」</p> <p>「そのことは近代日本の作家達の大部分に適用しうる」。即ち嘉村が持つ所の「甲構図性」により、乙構図の否定化がなされたと言ふ事。</p> <p>嘉村礒多によつて露はにされた事・・・乙図の自己欺瞞性（「無責任な自己主張と自己弁護、自尊と自己正当化」即ち似非実在感 D3）。</p> <p>「芸術（B）のみをとほして行はれた近代日本の自我確立とはそのやうなもの」・・・西欧構図（A の客体化による自己否定）との違い。</p> <p>嘉村礒多にある「実行と芸術との原理的な峻別」。そしてそれとは反対の「近代日本文学史の犯したこの両者の安易な一致」＝「俗人の生活の通俗な我執（A）が、そのままの姿で芸術（B）に持ち越され、芸術家の特権として正当化された」と言うこと。</p>

	<p>まらなく、それがあまりにつまらぬために自由でもなんでもないといふことを、克明に描写し証明してやること（それが小説「マダム ボヴァリー」：吉野注）」「現代日本文学の諸問題」</p>	
	<p>西欧近代自我の必然・・・認識（19世紀の個人主義的リアリズム）によって露出された「エゴイズム（自我の必然）。</p> <p>その個人主義の限界を知ることによつて、それに「果敢な闘争を開始し、それを攻略せんとする」、或は露出した「自己の不完全と俗悪と罪業とによつて、これを抛りどころとして自己の真実を打ち樹てる」事よりも、また個人主義の自由よりも、彼等は、絶対・全体との関係性を保った個人の純粋性の方を、真の自由と確信して選択した。</p> <p>リアリズム小説の限界・・・実証精神=Aの客体化（正しく認識）とB個人の純粋性（「現実のうちに正しく生きよう」=「神Cの回復」）と言ふ問題。『作品のリアリティーについて』</p>	<p>「近代日本文学史は徹底的な自己否定によつて嘉村礒多のうちに私小説の伝統の終局に逢着した」</p> <p>近代日本の特殊性を通じて行き着いたヨーロッパと同一的袋小路・・・</p> <p>「エゴイズム（自我の必然）」に到達した近代日本文学史。即ち「精神主義の、その極限に見いださずにはゐられなかつたものが、やはりほかならぬ自己主張のエゴイズム(A)」だと言ふ事。そしてそれは「ヨーロッパ近代精神とその表現としてのリアリズム小説（甲：『近代十九世紀の構図』）の危機と限界とを反映してみた」。</p>
P46	<p>「現実のうちに正しく生きよう」といふ問題・実証精神の限界・・・「自然を、現実を正しく認識するのは、自然のうちに、あるいは現実のうちに正しく生きようといふ目的のためにはほかならない。近代が——ことに19世紀が、この手段を目的から独立せしめ、それ自体の自律性を獲得せしめたのである。</p>	<p>乙：『非近代日本の構図』と同じ自然主義の自己喪失・・・自己主張による自己完成の倫理のゆきづまり。</p> <p>「無責任な自己主張と自己弁護、自尊と自己正当化」即ち似非実在感D3)。</p> <p>「社会的現実(A)から捨象して得た自我(B)の真実などと言ふものは存在しえないといふこと」。</p> <p>結局「自己は自己自身においては決し</p>

	<p>現実を正しく認識しようといふのは、自分の目のまへに自分から離れたものとして真実を設定しようといふことであり、現実のうちに正しく生きようといふのは、現実とのかかはりにおいてみずからが真実にみようといふことであつて、両者はおのづから別個のことがらである。(『作品のリアリティーについて』より。全2 : P266～)</p>	<p>て完成し得ない(個人主義の限界: 吉野注)」と言ふことだ。P45=ヨーロッパ個人主義と同一的帰結。『作品のリアリティーについて』</p> <p>「自己は自己自身においては決して完成し得ない(「自己喪失」)・・・自己演出的宿命(D1)→自己主張(D2)→自己完成(C)→「自己弁護、自尊と自己正当化」即ち似非実在感 D3)と言ふ事。</p>
<p>P47 近代自我 (個人主義)の限界・自己喪失が次に齎したもの。</p>	<p>「社会的価値を通じて以外に個人の存在は認められない」</p> <p>「肉体(A)の保証なくして精神(B)の自律性は保持し得ない」→社会の有用性としての個人(芸術・文学)→唯物史観</p> <p>参照:『小説の運命I』</p>	<p>*「自己喪失の救済」としてのプロレタリア文学・・・自分自身に責任を持つ個性Bは消滅し、ことごとくが経済的条件Aと階級闘争Aとの座標のうちに還元。P48</p> <p>プロレタリア文学の精神主義B・・・民衆の心理(現世の快楽と安逸とに固執するエゴイズムA)には完全に盲目。</p> <p>*「新感覚派」の技術的解決。</p> <p>結局どちらも「敗北(A)の)によつて自己(B)の真実性を確保し、その優越を誇らうとするに至つた」「近代日本文学の伝統たる敗北思想が彼等の支へとなるのであつた。自然主義作家が詩神に忠実を誓つたやうに、プロレタリア作家は彼等の主義に誠実」であつた。→『清水幾太郎』論への展開</p>
<p>P51～</p>		<p>昭和初期～二十年の現代文学・・・底流にある様相は「自己喪失」即ち自己完成とは道を通じてみない自己主張。</p> <p>しかも過去の先達たちが築き上げた芸術家概念(B主義)にアン如。しかもその後盾にヨーロッパ文学を援用。</p> <p>「自己完成の精神の完全なる放棄、し</p>

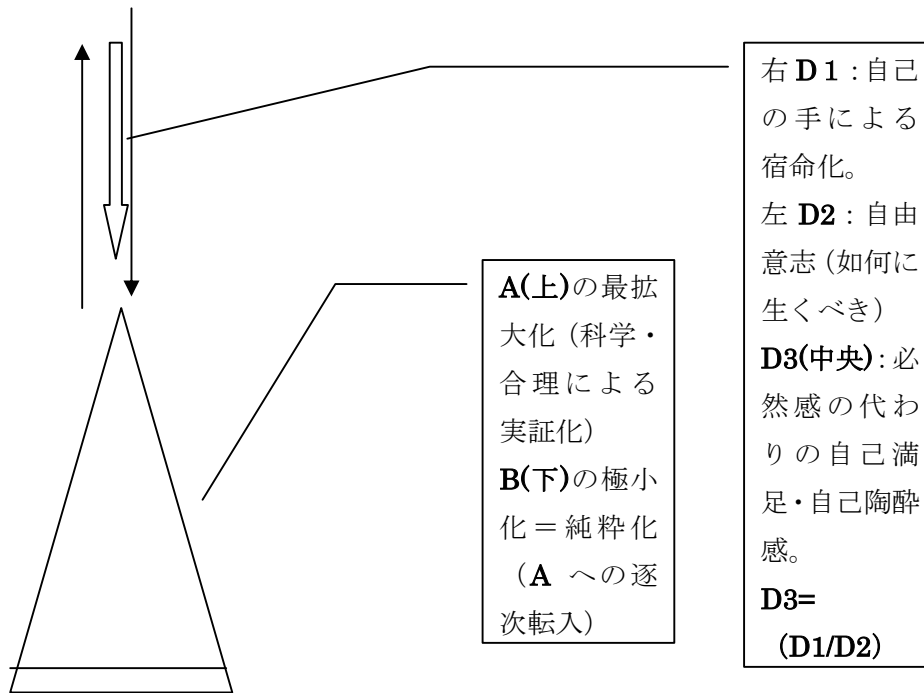
		かもそこに残留する自我意識（自己正当化・自己拡大欲）」
P52 日本文学界の キリスト教受容の取 り違い	近代ヨーロッパは「外部的（A 的）な解決の方向に展開しつつあったキリスト教であり、またそのやうな展開を必至にした近代機構」であつた。「近代文明はこの両者（AB）の混同を排することによつてかえつてキリスト教精神の純化を計つた」 即ち「甲の構図」	左記の状況を日本の文学界は、「純粹に精神の糧（B 精神主義・乙構図）として輸入」してしまつた。故に「彼等のキリスト教が現実（A）のうちに何の適応性もなかつた」。そこに「コンティニューイティイーにおいてキリスト教を掴みえてなかつた近代日本の宿命がはっきり読みとれる」
同	ヨーロッパプロレタリア革命意識の底に流れる、彼等の人間性を貫く（キリスト教の）歴史的社会的な一貫性。	左記を日本プロレタリア文学は見落としてゐた。伝統的キリスト教精神を欠いてゐるが故に「階級闘争の文学理論は単なる自我の権力欲にしかならず、民衆の心とは結びつかない」
P50・P51 最重要項目	西欧「自己主張（D2）」は、自己完成（C'）へ向けての「人間如何に生くべき」の自由意思に基づくものであるに反し、日本は自己完成の背景に神がなかつた為に、神に代る「詩神」は自家撞着を擁護するものでしかあり得なく、結果として「自己拡大欲・自我主義」に陥らざるを得なくさせた。（吉野補）→右へ 近代日本文学は精神主義における、芸術と生活の混同の中で「人間如何に生くべく」を考えた為上記のジレンマに至つてしまつた。と言ふ事では。 ~~~~~ *「ヨーロッパのヒューマニズムの母胎として僕たちはキリスト教精神の存在を——のみならず、それが実証主義のまゝに一葉の護符と化し、さつたのちにもなほ姿をかへて現に存続してゐる一貫性を——絶対に見の	「精神主義の帰結である自己喪失」＝自己完成とは無縁の自己主張が齎す自己喪失・・・近代日本文学史の精神主義の末路。 日本は西欧個人主義（甲構図）から自己完成への希求（理想人間像 C'）は学び得ず、結局そこからは「自我主義・自己拡大欲・自己主張（D2）」しか移植し得なかつた。何故か。乙構図からは甲構図は理解できず、キリスト教への不理解（適応異常＝「純粹に精神の糧としてのみ輸入」）が更にそれに拍車をかけた。と言う事では。（吉野補）：参照『近代の宿命』 ~~~~~ 左記への不理解及び「近代適応異常」から来る日本の不毛・・・アメリカの物質文明・ソ連の共産制はキリスト教精神と無縁或は否定から来るものとする日本の楽天主義。それ故に日本の「近代はつねに狂激と反動とのあ

	がしてはならない」	いだに浅薄な振幅を描きつつ、つひに 実る事がなかつたのである」と恆存は 強調する。
P52 恆存の先見 性。	「十年、二十年ののちをみるがよい ——唯物史観の限界のうへに純化さ れたクリスト教精神が明確な姿を現 すにそうみないであらう——しかも 唯物史観の功績に感謝の礼をはらひ つつ」	
参照： 『小説の運 命』 西欧リアリ ズム小説 (フローベ ール) ↓ (甲：『近代 十九世紀の 構図』)	「19世紀の個人主義的リアリズム による自我の否定にさらされなが らも、「つひに否定し扼殺しきれな い個人の純粋性 (B) を発見するこ とを念じて」みた。「かれらの夢想し てみた自我の内容の高さと深さとに 想ひいたらねばならず、その背景に 発見されるものは神 (C)」	
参照： 『独断的な あまりに独 断的な』 四十九年～ 五十年		「明治以後の文学を日本近代化の過 程として捉へ易く、且つ又日本近代化 の過程として明治文学を捉へた方が、 (中略) 話が解り易く、文学の為にも 社会の為にも遙かに生産的ではない か」 P515

《十九世紀》近代自我：個人主義と言ふ名の「動きまはる影・あはれな役者(マ
クベス)」 【西欧十九世紀構図 (甲)]・・・AB 分離線の最下降

・(C)・・・神（主人公）は背景へと遠ざかる。宿命(神意)からの解放。

・(C'') 個人主義（自己主人公化・自己全体化：神に型どれる人間の概念の探求）・・・宿命(神意)からの解放



次頁に「乙図」『近代日本文学史（精神主義）』の構図

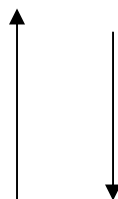
注：次頁の三角図の上に以下の図が挿入される。

* 否定因としてのキリスト教の神（C）と、詩神（自己の後盾：肯定因）との違い

* 西欧個人主義から日本が学んだものは「自己主張・自己拡大欲：D2」

**C2（詩神：自己への肯定因）＝（後盾・自家撞着）＝
 ・C “（自己完成）**

左線：（自己拡大欲 **D2**）
 右線：（自尊と自己正当化）
 即ち似非実在感 **D3**）



《以下の図の説明》上（Aの領域）の○二つは左が社会（客体）右が自己(主体)。その二者が離れてゐる、即ち不満足(非客対化)的状态。そこからB（文学・芸術・宗教）への逃げ込みが始まる。・・・「弱者の歪曲された優越意思」（ロレンス）と言ふ、洋の東西を問はぬ人間が持つ普遍的な劣勢心理。

